

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

第43号

● 目次 ●

論点：モンゴル国と東北大学	1
東北アジア通信：＝モンゴルとの研究・教育協力＝	
・ シンポジウム「モンゴル史研究と史料」の開催	2-3
・ モンゴル民族文化基金によるモンゴル学術交流会について	4
・ JENESYSプログラム・モンゴル訪日団	5
・ 日本への留学	6
編集後記	6



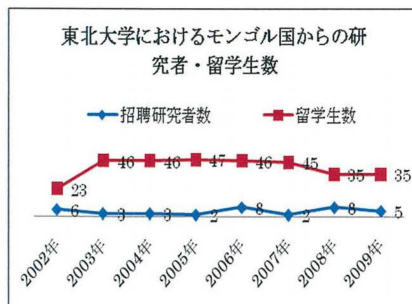
モンゴル国と東北大学

東北大学東北アジア研究センター 教授 岡 洋樹



あまり知られていないかもしれないが、東北大学は研究や教育でモンゴルとさまざまな関係がある。

学生数でみると、モンゴル国から2009・2008両年は35人、2007年には45人の留学生が在籍している。これは本学の留学生数では2007年は中国・韓国に次ぐ三番目、2008年は六番目、2009年には五番目の数である（各年度の『東北大学概要』による。グラフ参照）。



東北大学はモンゴル国の科学アカデミー、モンゴル国立科学技術大学と大学間学術交流協定を締結し、交流を行っている。2002年には阿部博之総長（当時）がモンゴルを訪問し、アカデミーから名誉博士号、科学技術大学から名誉教授号を授与されているし、一方のモンゴルからはアカデミー総裁（当時）B.チャドラー氏、科学技術大学学長（当時）D.バダルチ氏が東北大学を訪問あるいは客員教授として滞在している。また2001年にはモンゴルの教育・文化大臣ツェンジド氏が本学を訪問、視察を行った。こころみに東北大学のホームページで「モンゴル」を検索してみると、713件ヒットする（類似のものを含めると1000件）。それだけ、モンゴルに関わって研究・教育活動が行われているということになるろう。

本学を卒業して帰国し、活躍している卒業生達も数多い。例

えば大学院教育学研究科で博士号を取得したジャンチヴ・ガルバドラフ氏はウランバートルに「新モンゴル高等学校」を創設した。彼はここで学生に日本式の教育を施し、市民の高い評価を受けている。大学院薬学研究科を卒業したN.バトフー氏は、在学中から留学生のリーダー格で、仙台市民がつくるモンゴル国留学生後援会とも深い関係を維持している。現在彼はモンゴル国立大学生物学部で教鞭をとっている。大学院理学研究科を卒業したS.ジャルガラン氏は、地質学を専攻し、卒業後はモンゴル科学技術大学の教員となった。最近もたびたび来日して国際的な研究活動を行っている。大学院環境科学研究科を卒業したO.オユンジャルガル氏は、歴史学を専門としており、現在は科学アカデミー歴史研究所の研究員の職を得、同研究所清代史研究室の主任となっている。これらの卒業生たちは、日本語に堪能で、就職後も日本との関係を絶つことなく、東北大学はもちろんのこと、日本のさまざまな研究・教育機関との橋渡し役となっているのである。

我々東北アジア研究センターも、モンゴルとの交流を進めている。センター教員の現地での調査でさまざまな支援を得ているほか、客員教員や研究員の招聘、モンゴルでのシンポジウム開催などを実施している。

「うしとら」の本号ではモンゴル特集として、モンゴルとの研究・教育協力に関する活動の一端を紹介したい。

東北アジア通信 = モンゴルとの研究・教育協力 =

シンポジウム「モンゴル史研究と史料」の開催

東北大学東北アジア研究センター教授 岡 洋樹

東北大学東北アジア研究センターは、モンゴル研究の分野でも国際的な研究交流を進めている。

現在までにモンゴル国ではモンゴル科学アカデミー、モンゴル科学技術大学と東北大学が締結した大学間学術交流協定の世話部局であり、またモンゴル科学技術大学ジオサイエンス・センターとは部局間協定を有している。また中国内モンゴルでは、内蒙古大学蒙古学研究院、内蒙古師範大学蒙古学研究院とも部局間協定を締結し、交流を重ねている。

この内、モンゴル科学アカデミーとは、2003年（アカデミー歴史研究所と共催）、2005年（同国際研究所と共催）、2007年（同歴史研究所と共催）と三回の国際シンポジウムを開催している。

2009年9月20～21日の両日、ウランバートル市のモンゴル国立大学を会場として第四回目の国際シンポジウムを開催した。今回は東北大学東北アジア研究センター、モンゴル科学アカデミー歴史研究所に加え、内蒙古師範大学蒙古学研究院の三者での共催となったばかりでなく、国際モンゴル学者会議（事務局長Sh.ビラ博士）の要請で同会議第一回会議開催50周年記念として位置づけられることになった。テーマは「モンゴル史研究と史料」で、モンゴル史研究の史料に関する38件の報告（モンゴル24名、

中国内モンゴル8名、日本5名、トルコ共和国1名）が行われた。他にハンガリーから論文参加1名があった。

モンゴル研究は、伝統的にヨーロッパでは東洋学の一部として、また中国では辺疆研究の一つとして発展し、我が国でも特に歴史学・言語学を中心に、明治以来の長い歴史をもつ国際的な研究分野である。

ところが近年の動向として、研究の中心が、モンゴル国や中国内モンゴル、あるいはロシアのモンゴル系民族ブリヤートといった、モンゴル人が分布する地域に移りつつあることが指摘できる。モンゴル国が、社会主義時代から国際モンゴル学者会議を定期的に主催してきたことも、その背景にある。



写真2. シンポジウムのセッション会場の様子



写真1. シンポジウム開会式の様子



写真3. シンポジウムのセッション会場の様子

東北アジア通信 = モンゴルとの研究・教育協力 =

モンゴル研究の国際的組織として国際モンゴル学会がウランバートルに事務局を置いている。ちなみに同会議の現在の会長は我が国の言語学者で、『元朝秘史』の研究の第一人者小澤重男氏（東京外国語大学名誉教授）である。

今回のシンポジウムは、前三回同様、全ての報告がモンゴル語で行われた。モンゴル語は、国際的モンゴル研究の共通語になりつつある。トルコの参加者1名を除いて、内外のモンゴル人研究者はもちろん、日本からの参加者5名もすべてモンゴル語で報告を行った。

自国の研究をするのにモンゴルの研究者が外国語を使わなければならない時代は過ぎ去ろうとしている。モンゴル語は、すでに国際的学術研究の言語として共有されつつあるのである。

・・・ 以下、現代モンゴル点描 ・・・



写真4. ウランバートル市内の居住区；首都ウランバートルは、120万人が住むモンゴル最大の都市である。



写真5. ウランバートル市内のゲル(パオ)住宅街；壁に囲まれたマンションほど便利ではないが、伝統のゲルを好む市民も多い。



写真6. 冬のウランバートルの遠景；暖房に石炭を用いるため、ひどいスモッグが発生する。



写真7. 遊牧民の移動風景；牧畜は今でもモンゴルの主要産業であり、人口の2割ほどが遊牧民である。
(モンゴル国ブルガン県にて、1995年8月)



写真8. モンゴル国ブルガン県にて；モンゴル遊牧民の家庭を訪れると、外国人という珍しさもあって、たいへんな歓待を受ける。(1995年8月、後列右から2番目筆者)

東北アジア通信 = モンゴルとの研究・教育協力 =

モンゴル民族文化基金によるモンゴル学術交流会について

東北大学東北アジア研究センター教育研究支援者 包 聯群

モンゴル学術交流会は中国出身の在日モンゴル人の自主的な研究会である。第1回モンゴル学術交流会は2000年6月3日に早稲田大学にて開催された。

モンゴル学術交流会の役割は主に次の二点にあると考えられる。一つは、日本にいるモンゴル人留学生や研究者がお互いに交流を行い、自分の成果を発表できる場所となっている。もう一つは、モンゴル人留学生や研究者は日本のモンゴル学研究者たちとの交流を行う場所となっている。このような役割を果たしているからこそ今まで続けられてきたと思われる。

モンゴル学術交流会はモンゴル民族文化基金によって実行されている。モンゴル民族文化基金とは、日本に滞在する中華人民共和国出身のモンゴル人が主体となり、中国領内におけるモンゴル民族のモンゴル語による教育事業及び伝統文化の振興事業を助成することを目的とし、日本で2002年5月17日に正式に設立され、活動を行っている民間団体である。

モンゴル学術交流会は今年12月の時点で、すでに

第19回まで開催されている。今まで、早稲田大学、東京外国語大学、大阪外国語大学、東北大学、和光大学、新潟産業大学、千葉大学、日本大学、昭和女子大学などの大学と共催してきた。

モンゴルの歴史、文化、経済、環境、言語やそれと関連する多分野にわたる豊富な内容を含めた学術交流会では、各大学の先生方も招聘され、講演を行ってきた。こうして多くの大学の先生方の参加によって、モンゴル人と日本人モンゴル学研究者との交流が一層深められ、日本モンゴル学研究の進展にも貢献してきたと考えられる。現在、年に2回開催されるモンゴル学術交流会は、研究発表のみではなく、同時にモンゴルの文化、スポーツなどの紹介も行い、日本人との交流を深めつつある。



写真1. 2003年6月東京外国語大学第7回

(写真1～3『モンゴル民族文化基金』現理事長ムンクデルゲル氏提供写真)



写真2. 2007年6月新潟産業大学第14回



写真3. 2007年12月千葉大学第15回

東北アジア通信 = モンゴルとの研究・教育協力 =

JENESYS プログラム・モンゴル訪日団

東北大学東北アジア研究センター

教育研究支援者 佐藤 憲行



やや旧聞に属する話ではあるが、2007年と2008年に、外務省の「21世紀東アジア青少年大交流計画」（JENESYSプログラム）の、モンゴル訪日団受け入れに携わらせて頂くことがあった。

JENESYSプログラムとは、青少年の交流を通じてアジア各国との相互理解、関係強化を図るべく、日本政府の肝いりのもと、2007年より始まった大規模な国際交流プログラムのことである。主に東アジア、ASEAN、インド、オセアニア諸国から、年間6000人前後の青少年を短期招聘しており、モンゴルからも毎年、100人（高校生が中心）の若者が来日している。

モンゴルからの訪日団にはテレビ局クルーも随行しており、日本での滞在の様子は帰国後に全国放送されることから、モンゴルでの関心度は高く、選抜試験はかなりの難関であるという。

2週間弱の滞在は東京プログラムと地方プログラムの二つに分かれている。前者が基本的に全体プログラムであるのに対し、後者は4つのグループに分かれて、それぞれ日本の異なる地方都市を視察する。

現地では一日高校訪問、ホームステイなどを通じて、日本の社会や文化、習慣などを直に体験する。面白いのは、地方プログラム最終日、グループごとにワークショップを行い、そこで話し合ったこと

を「〇〇へのメッセージ」（〇〇の部分は何でも誰でも可）という形で、帰国前の全体報告会で発表することである。

筆者は偶々2度とも、兵庫県豊岡市を訪問するグループの担当であった。豊岡市は国内では一度は絶滅したコウノトリの再生を軸に、環境との調和を図る地域づくりを市政の中心に据えている。近年のモンゴルでは温暖化の影響による草原の退化、首都ウランバートル市の大気汚染やごみ処理問題など、自然環境の悪化が深刻化している。「科学技術先進国」日本において、豊岡市のような取り組みが行われていることに、モンゴルの学生たちは驚きつつも感銘を受けた様子で、ワークショップでは、目覚ましい経済発展の裏で確実に進む母国の環境破壊の現状について熱い議論が交わされた。全体報告会で「モンゴル国民へのメッセージ」として、自国の豊かな自然環境に一層自覚的であるべきであると訴える姿は印象的であった。

難関の試験をクリアして来日した彼らの多くは、将来のモンゴルの屋台骨を支える優秀な人材である。日本での貴重な十日間が、良き思い出以上のものになることを願いたい。

事務局からのお知らせ

<シンポジウム開催（10.2.20-21）のお知らせ>

毎年2月頃実施しております、東北大学東北アジア研究センター主催のシンポジウムのお知らせです。疎遠な一国の小さなニュースが世界を震撼させるに至る事も珍しくない今日この頃、ロシア周辺諸国の現状を、歴史観に立っての説明で総合的に把握するには良い機会と思われます。

◇平成21年度東北大学東北アジア研究センターシンポジウム；

「歴史の再定義」－旧ソ連圏アジア諸国における歴史認識と学術・教育－

◇日時；平成22年2月20日（土）13：30-17：00～21日（日）9：30-14：40

◇場所；東北大学片平さくらホール2階

◇内容；

- ・＜モンゴルの事例＞ 岡洋樹（東北大学東北アジア研究センター）
ボル・ブンサルドラム（モンゴル科学アカデミー歴史研究所）
- ・＜ウズベキスタンの事例＞ 浅村卓生（東北大学大学院国際文化研究科）
エルキン・アフンドジャノフ（ウズベキスタン文化大学）
- ・＜アゼルバイジャンの事例＞ 黒田卓（東北大学大学院国際文化研究科）
ジャミル・ハサンリ（バクー国立大学）
- ・＜グルジアの事例＞ 北川誠一（東北大学大学院国際文化研究科）
ヴァジャ・キクナゼ（グルジア歴史学・民族学研究所）
- ・＜ロシア連邦サハ共和国の事例＞
高倉浩樹（東北大学東北アジア研究センター）
アンドリアン・ポリソフ（ロシア科学アカデミーシベリア支部人文科学北方少数民族研究所）
- ・コメント；「中国の事例から」上野稔弘（東北大学東北アジア研究センター）

詳しくは、<http://www.cneas.tohoku.ac.jp> をご覧ください。

会員の広場

東北アジア学術交流懇話会

お互いの交流拡大を目的に会員皆様の近況・ご意見などを発信していただくスペースです(不定期)。

今回は、モンゴル科学アカデミー歴史研究所のオユンジャルガル氏に寄稿頂きました。

氏は本会には入会されてはおりませんが、留学生として東北大学に学び、本会発足当時から本会の諸活動にご協力頂くなどの経緯もあって、“モンゴルとの研究・教育協力”なる今号テーマの一環として特別にお願いし、本コーナーにご登場頂きました。

日本への留学

モンゴル科学アカデミー歴史研究所研究員

オチル・オユンジャルガル



私は1997年から2006年までまる8年間日本に留学した。最初の1年は仙台の日本語学校で日本語を学び、その後東北大学で研究生として入学、さらに博士前期と後期課程を卒業した。

1990年代といえば、モンゴルは社会主義から民主主義になり、それまで制限されていた外国への行き来が自由になった時期でもある。当時は外国、特にアメリカ、日本等の「資本主義」の国に行くことは、多くのモンゴル人の夢でもあった。その一人である私の日本留学の目的は日本語学習より外国に行くことであつたともいえる。そのため、最初は日本語学校で1-2年間勉強して、帰国するつもりであつたが、長引いて8年間も日本に留学・生活した。

帰国して3年以上経つ今から考えれば、日本留学は私にとって大変充実した時期であつた。もちろん、最初は生活する上で気候、食事といった生活環境、さらにその上に、二年目から東北大学に入学したこともあって、学問的にも新しい環境に順応しなければならなかった。当初は大学院レベルの講義を聞いても日本語で理解できる日本語能力も専門的知識も不足な私には、固有名詞しか分からなかった。また、レポートを書かせない「式」のモンゴルの大学を卒業した私には講義のレポートを書くのも一種の挑戦でもあった。だが、先生方や研究室の先輩たちの助けと指導により研究生から博士過程に進学して、その結果博士号を取得することができた。

また、私は私費留学生であつたために経済的に厳しい時期もあり、しばしばアルバイトをしていた。そのアルバイト先は、私の日本語会話の実習、日本人及び日本文化との接触の場でもあり、大学・研究室ではできないある意味「本当の日本」を体験した。それに仙台市留学生会館に住んでいたのも、毎日のように各国からの留学生と交流して、楽しい月日を過ごした。

このように日本留学によって私は、学問だけではなく、新しい環境への順応、異文化の理解という力を身につけ、人間として大きく成長したと思う。

編集後記

今回は、“モンゴル”特集記事として、モンゴルとの研究・教育協力に関する活動の一端を、本センターの岡先生を始め関係者に紹介して戴きました。

なお、スペースの関係から、今号は全6頁に増頁しております。

(石渡 明)

《うしとら》(東北アジア学術交流懇話会ニューズレター) 第43号 2010年1月20日発行

発行 東北アジア学術交流懇話会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41番地 東北大学東北アジア研究センター気付

PHONE 022-795-7580 FAX 022-795-6010

http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/ E-mail: gon@cneas.tohoku.ac.jp